

日本語教育と異文化伝道 ⑥

日本語教師の国家資格化

天理の日本語教育は、戦前から布教師が始めたものを含めれば80年位前から続いてきている。教団として本格的に力を入れ始めたのは戦後になるが、それでも60年以上になる。まだ「日本語教育」というものの専門性も確立されておらず、何もかも手探りで始まった。先人の苦勞には計り知れないものがあるが、きっと苦勞の中にも喜びがあり、やりがいを感じながら努めてこられたのかと思う。

2021年9月、いよいよ国が日本語教師の資格面について本腰を入れ、「公認日本語教師」という形で国家資格化する動きが出てきた。日本の少子高齢化がさらに進み、外国人をさらに受け入れていかなければならない状況になり、専門家としての資質・能力をもつ質の高い日本語教師を確保し、日本語学習環境を整備するねらいがあるようだ。また国家資格化により、日本語教師の職業としての社会的認知を高め、日本語教師養成を普及・推進することで日本語教師の質だけでなく、量の確保にもつなげたいようだ。こういった動きは歓迎すべきことだが、筆者の感覚としてはこういった国の動きはあまりに遅いように感じる。また国家資格化することで、本当に専門家としての資質や能力を確保できるのだろうか。ややもすれば規格化された教師ばかりを育成することにならないのだろうかとも感じる。

主任教員の申請資格

先日、新規の日本語学校の設立の相談を受け、お手伝いした時の話だ。その際、設立申請書類の中に主任教員の名前や経歴などを書き込むことになっている。そこで紹介された先生の中から420時間の日本語教育養成講座も修了し、日本語教育能力検定試験にも合格し、大学院で修士の学位も取り、大学で非常勤として教鞭も取り、日本語教師歴が18年もあり、日本語教材執筆や教材研究も行い、さらに国語や英語の教員免許も持ち、教師としての経験も豊富で主任教員として十分に推薦できる方を選んで申請してもらった。しかし、それは却下された。「法務省告示校で専任として3年以上の勤務歴がない」からだという。逆に解釈すれば、若くて経験が少なく、主任として後進を指導できるほどの技量や経験がなくても、「どこかの告示校の専任で3年働いた経験」さえあれば、主任教員として申請できるということになるであろう。そもそも法務省の「告示校」という制度自体もここ数年内にできたものだと記憶している。日本語学校では非常勤が多く、専任で3年以上の勤務経験となるとさらに人材を探すのが難しくなる。また海外の大学や日本語学校での教授経験なども考慮されないようだ。こういった対応はどうかのだろうか。

日本語教育の役割は大きい

法律や制度が整備されていくのは望ましいことであるが、それが実情とは合わずに、逆に締め付けるだけになっている部分もあるのではないだろうか。こういった事例はどこにでもある話なのかもしれないが、問題に気が付いた者から声を上げていくしかないのかもしれない。新型コロナで多くの大学や日本語学校で留学生が入国できず、経営面でも苦しいところがあると聞くが、今後、感染が終息していくことにより、入国も緩和され、

留学生の数も増えていくことと思われる。また留学生だけでなく技術研修生や特定技能で来日する外国人もさらに増えるであろう。ますます日本語教育の持つ役割は大きくなると思われる。以前、この誌面で日本語教育も多様化していることについて述べたが、それらにしっかり対応していくには杓子定規な対応で、流れに逆行してしまうようなことが起こらなければと願うばかりである。

恩師

最終回に当たり、筆者にとって一番長く一緒に仕事をし、多くの指導をいただいた渡辺治則先生のことを少し紹介したい。渡辺先生はパリへも赴任され、天理大学選科、別科時代を通して、天理教語学院の開校申請に携わり、開校後は日本語教育センター主任を経て、語学院校長もされた。別科時代には「Communicative Approach」(以下「CA」)についてよく研究され、副教材に「CA」を取り入れて、実践されていた。勉強不足の筆者に「CA」について何度も丁寧に教えてくださった。「CA」はアプローチの一つであり、「Audio-lingual Method」(以下「AL」)はメソッドであり、具体的な教授法の一つであると説明して下さい、自分なりに勉強してきたが整理できていない部分を明解に教えてくださったことが印象に残っている。今の時代でこそ、コミュニケーションな教室活動は当たり前になってきたが、当時は従来の古い教え方ではダメだとして、新しい教授法を取り入れていかなければいけないという雰囲気もあり、多くの日本語教師の頭を悩ませたように思う。歴史的に見れば、天理大学は語学教育に力を入れ、その当時、最新のLL機器を開発し、授業に取り入れ、大きな成果を残してきた。しかし、成功例があるとそれが正しく、なかなか新しいことにチャレンジしたり、取り入れたりすることが難しくなる面もあるのではないだろうか。いつの時代でもパラダイムシフトは起こるものであり、常に研究が必要である。渡辺先生は学習者のことを考え、どうすれば効果的に教えられるか、どうすることが最良の方法なのかを常に考えておられたのかと思う。そのために常にアンテナを張り、研修会にもよく出かけ、教育に関する文献もたくさん読まれ、筆者にもよく紹介してくださった。今も感謝する次第である。

ご挨拶

早いもので、この連載も最終回を迎えることになった。当初、お話をいただいて3年ということで書き続けてきたが、その間に定年退職も迎えた。原稿を書くにあたり、歴史的なこともあれこれ調べている内に、天理の日本語教育の歴史の中では、自分が勤めた期間など、ほんの一部分に過ぎないということを感じた。しかし、そこに自分が少しでも携わり、一翼を担うことができたのかと思うと、感謝の気持ちでいっぱいである。原稿を書くにあたり、お礼を申し上げたい方は教内・教外を問わず、大勢おられるが、誌面の都合もあり、ご無礼することをお許しいただきたい。自分と関わりのある方々に支えられて何とか最終回を迎えることができ、心より御礼申し上げます。皆様、本当にありがとうございました。